

図書案内

2017年 11月号

担当 1-5H 浦田 1-5H 平井

特集 センター試験(国語)で出題された本

秋も深まるにつれ、**センター試験が近づいている**と感じる人も多いのではないのでしょうか。そこで今回は、**過去のセンター試験(国語)に出題され、かつ読書を楽しむのにぴったりな本**を特集しました。問題文に採用された部分はわずかですが、**一冊読んでみることで新しい発見があるのでは?** この機会に是非手に取ってみてください。

図書館にて貸出しています。



1990年
出題

『幽霊』 北 杜夫／著

鮮やかに、透明に美しく描かれる昆虫、可憐な少女、大自然、そして幼年の記憶。高校生のぼくが幼年時代に体験したこと、それに加えられる今までの経験によって得た知識が、明暗、濃淡、彩りを世界に与えるような作品だ。また、解説も興味深いので是非読んでいただきたい。

織るということは、ときとすると残忍なことのようだ。それは未知の隠秘にまつわる光輝を半ばおおいかくしてしまう。

『キャラ化する／される子どもたち』 土井 隆義／著

本書は、子どもたちのコミュニケーションが、役割を固定し単純化された形で行われる＝キャラ化している、ということを取り上げています。相手との摩擦のないフラットな関係を求めることがキャラ化を起し、その現象はグループ内や親子間でも起きているのです。スクール・カーストに代表される人間関係が「キャラ」というキーワードを使ってわかりやすく分析されている一冊です。

生きづらさが増大しているか否かを問うことには意味がありません。むしろ、その生きづらさの性質が、社会の拘束力の強さにもとづくものから、人間関係の拘束力の強さにもとづくものへと、時代とともに変化している点に目を向けるべきなのです。

2016年
出題

音質を最も左右する立役者「マレット」とは?

主人公が演奏するティンパニという楽器は、マレットと呼ばれるばちを使って演奏します。マレットには多くの種類があり、それぞれ素材や硬度、ヘッドの心材や大きさが異なります。楽器の演奏方法や曲の雰囲気合う音色を出せるマレットを選ぶことが大切なのです。



2010年
出題

『楽隊のうさぎ』 沢村 けい／著

内気な中学生・克久は入学後、ブラスバンドに入部する。周囲から心を閉ざす克久の胸には、ある日公園で見かけたうさぎが棲みついていた。時にはうさぎに助けられ、部活や友人・先生・両親との関わりの中で克久は成長し、音楽に夢中になっていく。緊張感の伝わる細かな描写なので、吹奏楽経験者には特におすすめです。

タクトが振り下ろされる瞬間を待っていると、空の座席すべてで人が息を殺しているように感じられる。自分の繰り出す一発の音が、世界のすべてを作り出すのだという緊張が克久の身体の奥からゆっくり染み出す。



秋の夜長にはなぜ読書?

秋といえば読書と答える方も多いはず。しかし、なぜ読書なのでしょう。これは、中国・唐中期を代表する文人である韓愈の「符読書城南」(『全唐詩』341巻)の一節である「燈火稍可親、簡編可卷舒」が由来となっています。現代語訳すると「秋の夜長は明かりをつけて、そのもとで読書をするのに適している」とのこと。夜の訪れが早いこの時期は、昔から勉強や読書に最適な季節とされていたのです。

また、秋の涼しさは心身を穏やかで安定した状態にし、読書はストレスを緩和するとその研究結果が報告されています。つまり、秋の読書にはリラックス効果があるということです。

秋の夜長を読書で彩ってみるのもいいかもしれませんね。



国語科 砂田麻理先生からオススメの1冊

『忘却の河』 福永 武彦／著

1993年
追試出題

忘却の河とは、その水を飲むと死者は現世での記憶をなくすという河のこと。本作はある家族の独白7章からなり、今読むと時代背景等の古めかしさは否めないが、理知的で静謐な文体で描かれる孤独や愛の挫折、そして悲しみは作者の通底したモチーフである。高校2年に『草の花』を耽読して以来、福永は好きな作家の一人。ちなみに2013年に作者の『夢見る少年の昼と夜』、2002年に作者の子・池澤夏樹も追試で出題されている。

どれほどお気に入りの作品であっても、問題を解く際には主観を押さえた客観的な読解をお忘れなく。

